
黒の組織からの女の恋

星乃宮 莉衣奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の組織からの女の恋

【Nコード】

N3089L

【作者名】

星乃宮 莉衣奈

【あらすじ】

黒の組織が一員をFBIにスパイとして送り込む作戦を行うことにした。

選ばれたのは宮乃朱梨^{みやのあかり}。

最初は、FBI全員を敵として見ていたが、親切にしてくれる人々と出会い、初めて親友が出来て、組織から抜け出たくなった。しかし、組織から抜け出そうとして殺された人々は少なくはなかった。

そんな悩み続ける彼女は次第にFBI捜査官赤井秀一に恋心を抱くようになった。

そして、宮野明美そっくりの声をもち、明るい性格に惹かれる赤井秀一。

潜入

「え？私が？」

「そうだ。お前だ。」

「ちょ、なんでいきなり？」

「あの方の命令だ。」

「…っ、分かったわ。つまり私の任務は…」

「ああ。この組織のデータ全てを破壊させる。」

「了解、ジン。」

「本社へのハックは別の奴がする。」

「了解。」

「あと一つ。」

「何かしら。」

「赤井秀一には気をつける。」

「分かってるわ。シルバートレット、赤井秀一。」

「もしお前がスパイだとバレたら…」

「死が待っているのね。」

「ああ。」

「ふん。じゃあ行ってくるわ。」

「しくじるな、アクアビット。」

「ええ。ウオツカ。」

宮乃朱梨。

18才。

今、彼女のミッションが始まりました。

潜入（後書き）

今週中間テストなんで、来週次話アップします

明美…？

「ねえ、シュウ。ねえ。」

「あ、すまないジョディー。」

「もう、大丈夫？少し寝てら？」

「いや、寝たら寝てる間に何か起こりそうだね。」

「んもう。」

「水無怜奈の意識は戻らないままか…」

「ええ。そうね。」

二人ともずっと水無怜奈の寝ているベッドを見つめた。

「あ、そういえばね！新しいメンバーが来たのよ。フランス人のハーフだね。名前は確か…」

「ジョディーさん、入室してもいいですか？」

赤井が止まった。

「あら、噂をすれば。いいわよ。シュウもいる事だし。」

ゆっくりとドアが開き、彼女が入ってきた。

「宮乃朱梨さんよ。同じみやのだけれど、漢字は違うのよ。」

「よろしくお願いします。」

赤井は動きを止めた。

「シユウ？」

「どうかしましたか？」

「明美……」

「シユウ……」

病室の空気は静まり返った。

「あの……明美さんって……？」

「あ、いや、何でもない。声が似ていてな……ある女に。」

「はあ……」

「気にしないで、宮乃さん。昔の話。」

やっぱり、まだあの人の事が忘れられないのか、シルバーブレット……と密かに朱梨は思った。

「申し遅れました。私、昨日ニューヨークから来ました、宮乃朱梨です。まだ日本の生活などに慣れていないので、迷惑をお掛けするかもしれませんが、よろしくお願いします。」

「あら、可愛くて礼儀正しい子！私はジョディー・スターリング。彼は赤井秀一。」

「はい。よろしくお願ひします！」

上手い演技で挨拶をする朱梨は、ちらりと眠り姫を見た。

キール…

あなたいつまで寝ているつもり…？

長くいればいるほど…ジーンに疑われるだけよ…

小さなFBI

「えっと…データ室…」

朱梨は早速データ破壊を考えていた。

「おい。」

「へっ!?!」

「お前、何キョロキョロしている。」

「あ、赤井さん…あの…お手洗い探して…」

「それならこの廊下を真っ直ぐ行って右だ。あまりキョロキョロするな。」

「す、すみませんでした…」

やはり手強い…作戦立て直しだ…と朱梨は思った。

「宮乃さん!」

「ジョディーさん。」

「今日、お昼一緒に食べない?」

「え?」

「宮乃さん、まだ日本に慣れていないし、ちょっと案内しようかしらと思つて。」

「ありがとうございます。でわ、是非いきます」「ジヨディーを私を信用させるいいチャンスだわ。」

「シユウはどう?。」

「俺はいい。あのボウヤと作戦を考えておく。」

「そう…分かつたわ、シユウ。いきましょ、宮乃さん。」

「あ、はい。」

ボウヤ? FBIに子供?

朱梨は辺りを見渡し、子供らしき人物を探したが、見当たらなかった。

「まさかね…」「とつぶやきジヨディーとエレベーターに向かった

振り返り

「私、いいカフェ知ってるの。サンドウィッチは好き？」

「あ、はい。大好きです。」

「じゃあ、サンドウィッチとコーヒーね。もちろんおごり」

「わあ、ありがとうございます」

「宮乃さん、すごく似ているのよ。」

「その明美さんって人に？」

「違うわよ。私の大親友だった人。もう二年前に組織殺されたけれどね。」

「そうなんですか…」

「ココよ。カフェサンシャイン。昔、シュウが明美さんで行ったの。」

「すごいオシャレですね〜。」

「でしょ？一見普通のカフェなんだけれど、夜はスゴイの！ステキなバーになるのよ。」

「へえ。じゃあ、今度夜に行きませんか？」

文を言い終わった朱梨ははっとした。

朱梨はいつ最後に人を誘っただろうか。

こんなに親しく人と話したのは何年ぶりだろうか。

朱梨が組織に入ったのは中学生の頃だった。

親が組織と関係し、幼い頃からハッカーとしての教育を受けて来た。

毎日毎晩、友達と遊ばずパソコンの前で過ごしていた。

その幼い頃からの才能をジンは認め、彼のグループに入った。

恋バナ

「…さん…？宮乃さん…？」

「あ、はい。」

「大丈夫？」

「はい。」

「じゃあ、コーヒー二つとBLTね。」

「あ、お願いします。」

「ねえ、宮乃さん、彼氏いるの？」

「い、いませんよ！」急な質問に朱梨は慌てた。

「へえ。てことはフリーかあ。」

「ジョディーさんは？」

「とっくの昔に振られたわ。」

「えー、誰にですかあ？」

「シユウよ。組織に潜入する為に別れたわ。」

「赤井さんかあ。」

「シユウ、ポーカーフェイスで、怖い印象あるかもしれないけれど、いい人よ。」

「そうなんですかあ。」

「昔はものすごく長髪だったのよ。」

知ってる。

シエリーが写真を持っていた事を思い出した。

「シユウはものすごく思いやりのある人よ。」

「今度話してみます！」

「ぜひ話してみて！」

「はい。」

朱梨は分かっていた。

赤井秀一と話すのはすごくリスクが高い事。

過去

「ジョーデー！。今何時だと思っているんだ。」

「ごめんなさい、シユウ。ガールズトークでね。」

「全く……」

「あの、なんかすみません…私のせいで…」

「いいのよ。とても楽しかったし。」

「ジョーデー君。」

「ジエームズ。」

「この方が、新人捜査官かね？」

「ええ。宮乃朱梨さんです。」

「よろしくお願いします。」

「赤井君が言った通り、面影が宮野明美にそっくりだ。」

「あの…前から気になっていたんですが…宮野明美さんって…？」

空気が変わった。

赤井は、自動販売機のボタンを押すのをやめて、朱梨を見た。

「お前には関係ない。」と言い捨て、ボタンを押し、出て来た缶コ
ーヒーを取った。「作戦は考えておく。」

「ちょ、シユウ。」

赤井はさっさと部屋から出て行った。

「あの…ごめんなさい…」

やはりまだ心に残ってるのか…赤井…朱梨は謝りながら思った。

「心配しないで、宮乃さん。」

「赤井君はまだ彼女の事が忘れられないのだろう。」

「そうですね…」

悲しい目でドアを見つめる二人を、朱梨はちらりと見た。

朱梨の胸の奥がちくつと痛んだ。

？

朱梨はなんだったのか分からず、それが彼女の運命を変える事さえも知らなかった。

自覚

「ねえ、今度は三人で行きましょうよ。」

「悪いが、パスする。」

ジヨディーは、三人でカフェに行こうと提案したが、赤井は予想通り却下。

しかし、ジヨディーは粘り続け、赤井はついに降参した。

「え、三人で？」

「そうよ、シユウも。」

「私、お邪魔になると・・・」

「いいのよ、明日のお昼。ね？」

「あ、はい・・・」朱梨もさすがにジヨディーの勢いに負けた。

赤井さんと・・・かあ・・・

朱梨の胸が高鳴った。

変だなあ・・・なんでこんなにドキドキするの？

朱梨は思いながら、組織の事を思い出した。

いけない、

早くデータを消さないで。

朱梨は再びきよるきよるし始めた。

「おい。お前。」

ドキッ！

カシャン！

「あつ。」

朱梨はケータイを落とした。

朱梨が座り込む同時に、赤井もかがんだ。

ドキッ。

？

朱梨は動きを止めた。

「ほら、ケータイ。壊すなよ。二年契約だろ？」

「あ、あり……ありがとついでいます……」

いけない……

朱梨は焦った。

私・・・赤井さんに恋してる！

自覚（後書き）

明日から修学旅行なので、すこし更新辞めます。

あと、前みたいに毎日は更新出来ないときもあると思います。

でも、この小説は絶対に終わらせませんので、楽しみにしていってください！

ジン

「え、行けなくなった？」

「そうなのよ。急に用が出来ちゃって。」

「じゃあ、今日は・・・」

「シユウと行って。」

「え？」

「あのカフェ、予約しちゃったのよ。だから。ね？」

「は、はい・・・」

朱梨は静かに電話をおいた。

まずい・・・

赤井秀一と二人だと、正体がバレる可能性が高い・・・

でも、話したい・・・

組織の一員としてではなくて。

異性として。

お姉ちゃんだったらどうした？

そう思っていたらケータイが鳴った。

「久しぶりね、ジン。」

「どうだ、アクアビット。」

「データ室に近づけないわ。」

「何？」

「赤井秀一でね。」

「ヤツか・・・」

「もう少し信頼されるように、時間が欲しいの。」

「分かった・・・また電話する・・・」

朱梨はケータイを閉じた。

朱梨は真剣に悩んでいたのだ。

ふと時計を見ると、

「いつけない！もうすぐ11:30だ！行かないとっ！」

ドタバタしながらも、朱梨はずっと赤井の事を思っていた。

デート（前書き）

人物プロフ

宮乃朱梨

みやのあかり

年齢 | 23才

身長 | 168

コードネーム | アクアビット；組織最高のハッカー

ハッカーと同時に、アメリカでモデルとして活躍。

デート

朱梨が待ち合わせの公園に着いた頃は、既に赤井はいた。

「あの．．．赤井さん！」

「宮乃。」

「あの、遅れてすみませんでした！」

「ああ。別に構わない。」

「あの．．．」

「何だ？」

「えっと、タメ口いいですか？」

「別にいいが。」

「よかったあ。じゃあ、行こう。」

「ふっ。」

赤井は鼻で笑った。

「な、何？」

「いや、ある人を思い出してな。」

「宮野明美さん？」

「ああ。陰で泣いていた馬鹿な女。」

「ふーん。」

「そういえば、お前はなんと呼んだら良い？」

「普通に朱梨でいいわ。」

「分かった。早くカフェに行こう。せつかくジョディーが予約してくれたんだからな。」

「うん。」

「最近組織が動いていない。」

ドキッ。

朱梨の心臓が止まりそうになった。

なさか、バレた・・・？

「何か企んでいるのか・・・」

「きつと水無怜奈を奪い返すために作戦を考えているんだわ。」

「いや、ジンの事だ。作戦を立てても、すぐに実行するはずだ。」

「そうよね・・・」

「FBIの中にスパイがいてもおかしくない状態だ。決して、この事は本部または病院以外のところで話さないように。」

「了解。」

フツ。

馬鹿な男。

そんなに組織と再会するのが楽しみなの？

朱梨は密かに思った。

「あ、ココだよ。」

「ほお。ココか。懐かしいな。」

「まあまあ。昔の事は放っておいて、中に入りましょ。」

朱梨は、赤井よりほんの少しだけ身長が低かったため、軽く背中を押して店に入った。

会話

「二名様ですか？」

「はい、そうです。」

「ジョディー・スターリング様ですね。」

「あ、はい・・・」朱梨は少し戸惑ったが、一応そう答えた。

「こちらへどうぞ。」

「行こう、赤井さん。」

「あ、ああ。」

店員が二人を案内したのは、外の風景がよく見える、一番景色のいい席だった。

「これはあとでジョディーに感謝しないとな。」

「ええ、そうね。」

「じゃあ、ブラックコーヒー。」

「赤井さん、それだけ？」

「ああ。いけないか？」

「あ、いや．．．ちゃんと栄養のあるものも食べないと．．．それに、クマ出来ているし．．．」

「クマはいつもの事だ。それに、ブラックコーヒーで十分だ。」

朱梨は思い出した。

諸星大、こと、赤井秀一は、宮野明美の手料理に一切手を付けず、明美を悩ませていたとシエリーが言っていた事。

「ココのBLT、最高においしいのよ。」

赤井はタバコを取り出ししている途中だったが、止めた。

「それに、タバコは吸わない方がいいわよ。」

「お前．．．」

「んっ？」

朱梨はちよっとビックリした。

今まで、赤井は朱梨とは目を合わせずに話していたのに、今だけまっすぐ見ていたからだ。

もしかして、気づかれた？！

朱梨は焦った。

「いや、あの女もそっくり同じ事をココの席で言ってな．．．」

「ふーん……」

「それに、お前の声が妙にあいつと似ていてな。」

朱梨は黙っていた。

これ以上しゃべったら、バレてしまう。

と思い、ずっと下を見ていた。

が。

赤井がBLTを二人分頼んでいるのを見たら、妙に安心して、久しぶりの笑みがこぼれた。

惹かれてゆく二人

「あー、おいしかった。」

「ちよつと一服・・・」

赤井はそう言いながらタバコとライターを取り出した。

朱梨はすぐにその二つを取り上げた。

「ダ・メ。」

「お前には関係ないだろう。」

「タバコ吸わなくても生きていけられるでしょ。それにね、そのクマもきつとタバコのせいよ。」

「クマは元からだ。」

「とにかく、これ以上吸ったら、死んじゃうわ。」

朱梨はそう言い捨てると、走り出した。

「早くー、赤井さん！映画始まるわよー！」

その時、赤井は、目を疑った。

見えたのは、明美が朱梨にかぶっていた姿だった。

「おかしい・・・」

「どうしたの？」

目をもう一度開けたら、朱梨はこっちに戻ってきていて、明美はいなかった。

「いや、ちょっと・・・な・・・」

「きつと寝不足なのよ。今日は帰ろうか。」

「あ、すまない・・・」

「いいわよ。ね、今度映画行かない？」

「ああ、別に良いが・・・」

「本当！？今すっごい観たいのあるの！今度行こうね。」

朱梨がそう笑った時。

ケータイから、ジンの着メロが鳴った。

「ごめん、今日は帰るわ。」

「ああ。すまなかった。」

朱梨は手を振って、すぐに去った。

人影の少ないところに行くと、すぐケータイを開いた。

「何かしら、ジン。」

「どうだ、赤井秀一は。」

「まだ宮野明美の事が忘れられないみたいよ。」

「やはり・・・」

「だから、もつと信頼関係を深めるのよ。そうしたら、データ室に行き、消せるわ。最高の場合、赤井秀一を殺せるかも・・・」

「分かった。気をつける。」

「了解。」

朱梨は上を見た。

宮野明美が殺された日も青空だった。

おねえちゃん・・・

朱梨は首が痛くなってもずっと上を見ていた。

惹かれてゆく二人 (後書き)

朱梨と明美の関係は!?

明日も更新予定!

本心

「おはようございます!」

「ああ。」

今日朱梨は、水無怜奈の入院している病院で監視する事になった。

「またコーヒー・・・?」

「ああ。どうしても飲みたくてな・・・」

「ふーん・・・」

「屋上から監視だ。行くぞ。」

「はい・・・」

カツン。

カツン。

ハイヒールの音が階段で響く。

赤井が屋上への扉を開けると、青空一面が見えた。

「わぁ．．．！」

「いい天気だな。これがお前の双眼鏡だ。落とすなよ？」

「はいはい。」

「そういえば、お前、なぜFBIに入ったんだ？」

．．．

「どうしても忘れられない事件を調べるためよ。」

辛い過去

「両親とも、組織に殺されたわ。私が従姉妹と遊んでいた時、見てしまったのよ。両親が拳銃で撃たれ、家に火を放つところをね。」

「誰が殺ったんだ？」

「風で分かったのよ。犯人がかぶっていた帽子が飛ばされて、一度見たら忘れられないプラチナブロンドが見えたのよ。」

「ベルモットか…」

「そうよ。その何週間か後、従姉妹の両親が事故で亡くなったのよ。」

「それでFBIに…」

「ええ。国籍はアメリカだったし、その後すぐNOCにお世話になったわ。」

「偶然だな…俺もFBIに入ったのは組織が理由でな…」

「へえ。」

「こんなに組織と会えるなんて夢みたいだ。」

赤井は不敵な笑みを浮かべた。

朱梨は、本当の事を話していた。

彼女の親は、従姉妹と遊んでいた時ベルモットに殺された。

招待

「そういえば、明日新人捜査官の歓迎会があるんだが…」

「ワオッ」

「お前なら、出席するだろうな？」

「もちろん」

「今回、15人新しく加わった。増えるのはいいが…水無怜奈が起かない…」

「組織も姿を現さないし…」

「いや、とつくに現している。」

ドキッ。

朱梨は驚いた。

「この病院にいる可能性も低くはない。」

「監視って何をするの？」

朱梨は話題を変えようとした。

「…」

「双眼鏡で周りを観察するの？」

赤井は朱梨を見つめた。

「赤井さん？」

「不信な車…特にポルシェ356Aに気をつける…コーヒー買って来る。」

「了解。」

「お前は怪しくない。100%とは言えないが、期待しているからな。」

「分かった。ありがとう。」

バカなシルバートレット…

朱梨は心の中でそう思った。

「赤井さんは付き合っている人いるんですか？」

赤井が足を止めた。

「いや。いないが…」

「そう…なんですか…」

「何か？」

「いえ、任務に戻るわ。」

準備

純白のミニワンピース。

ピーチのパンプス。

金のパールネックレス。

フワフワの巻髪。

茶パツの地毛。

「よし、オツケー！」

朱梨は仕上げのピーチグロスを付けた。

「準備出来たかしら、宮乃さん。」

「はいっ。」

朱梨はジョディーのアパートにいた。

ドレスを持っていなかった為、ジョディーのを貸してもらった。

「本当は、このワンピース膝のちょっと下までなんだけれど…宮乃さん私より背高いから、短くなってしまったわね。」

「大丈夫です。こんな素敵なワンピース貸してもらえるなんて。」

「はい。」

「行きましょ。」

痛み

「あんな可愛い捜査官が入ってきたぞ。」

「イギリスと日本のハーフだってよ。」

「まじ好みっ!」

15人新しく加わった捜査官の中、朱梨が一番人気だった。

「ねえ。あたし、カエラ・クロウフォード。日本とアメリカのハーフ。よろしくね。」

「よ、よろしく……」

「ねえ、あなた、狙ってる?」

ギクツ。

「だ、誰を……?」

「もっちろん、赤井さんよ。」

「な、なんで……?」

「だってあたしもー?もう素敵じゃない!クールでハンサム!」

朱梨は安心した。

なんだ、別の意味か…

が、まだモヤモヤ感が残っていた。

「今日、告白するんだあ。」

「ふ、ふーん…がんばって…」

朱梨の胸が痛んだ。

「……がんばって……」

「どうしたの？」

「ジョディーさん。」

「顔色悪いわよ。」

「そ、そういえば…今日トイレ一回も行ってない…」

そっか…

痛いのは、トイレに行っていないからかあ…

「トイレなら廊下の突き当たりよ。」

「はい。」

告白

「あゝ、助かった。」

朱梨は長い廊下を歩き出した。

「すまないが、俺はその気はない。」

？

一つの部屋からあの声が聞こえた。

「お前とは付き合えない。」

「な、なんで!?!」

中を除くと、赤井さんとカエラがいた。

「他にいるの!?!」

「…ああ。」

ずきん…!

朱梨の頭が真っ白になった。

やっぱり…赤井さん…明美お姉ちゃんが…

体の力が抜け、ハンドバッグを落とした。

「!?!」

赤井は音に気づき、ドアを見た。

「朱梨…!」

赤井は朱梨の後を追いかけた。

カエラはすぐにケータイを取り出し、あの番号を打ち始めた。

七つの子。

「赤井も朱梨も本気よ…ヤバイわ。」

「そっか…いざとなったらアクアビットを連れ出せ。」

「了解、ジン。」

叶わぬ恋心

やっぱり…

無理…

朱梨はホテルの前に逃げていた。

自然に大粒の涙が出てきた。

「はぁ… やっぱりダメなんだ…」

「朱梨…」

朱梨は驚いて振り返った。

「なんで…?」

「カエラは断った。お前の為にな。」

「えっ…?」

「俺は…お前を愛しているからな…」

え…?

「本当に…?」

「俺が嘘をついたのは一度だけ…組織にいた時だけだ。」

「良かった…！」

朱梨は赤井に抱きついた。

「今だ。」

「了解。」

カエラがボタンを押した。

ドン！ドン！

「な、何！？」

「ビルが燃えている！」

「えっ！？」

赤井がビルに走り始めた時、カエラが朱梨の口に睡眠薬を含ませたハンカチをあてた。

「ジンが呼んでるよ…」
「ご苦労様…」

再会

「ん…」

「ご苦労様、朱梨さん…いいえ、アクアビット…」

「ベルモット…!」

「赤井秀一とは相当行ったのね…」

「そうよ。」

「それは良かった。」

「ジン。」

「データは消せたのか？」

「ええ。天才ハッカー、アクアビットだもの…」

「ならば後はキールだけだ。そして赤井秀一。」

「!?!?なんで赤井!?!」

「お前があいつといる時、お前はいつもと違う。これ以上深く行くと…我々には邪魔だからな…」

「な、何を…?」

「あいつを呼べ。」

「え!？」

「お前はあの世に行きたいのか…？」

ジンは朱梨の頭に拳銃を突きつけた。

「分かったわ。電話すればいいのよね。」

「ああ。」

愛しい恋人

「助けて、赤井さん！」

「朱梨か！？今どこにいる！」

「お前になら分かるだろう。この電話の発信地を調べるだけだからな。」

「久しぶりだな、ジン。」

赤井は鼻で笑った。

「この女を助けたいなら、すぐにココに来い。」

「ふんっ。指一本触れるなよ。」

「ああ。」

プツッ。

赤井はケータイを閉じ、ニヤリと笑った。

愛しい恋人との対決を何ヶ月待っただろうか。

「んっ…」 水無怜奈は静かに目を開けた。

「水無怜奈…！」

ジヨディーは水無の急な目覚めに驚いた。

「んっ…ココは…？」

「病院よ。」

「何で私を…？」

「シユウがそう言ったのよ。」

「赤井秀一…彼はどこ…？」

「新人捜査官が組織に拉致されて、助けに行ったわ。」

水無怜奈の顔が強張った。

「その…捜査官の名前は…？」

「宮乃朱梨よ。」

「赤井秀一は殺されるわ。」

「な、なぜ？」

「宮乃朱梨は偽名…本名は宮野明保…組織の一員よ…」

「な、なんですって!？」

「まあ、もう手遅れね…」

「な、何故!？」

「分かるのよ。組織の一員だもの。」

キールはふつと笑い、目を閉じた。

間違い

「電話したわ。」

「ふんっ。赤井は俺とお前と三人だと思っている。」

「あら。あなたも間違っただわね。ジン、あなた、赤井に一人で来るようにとは言わなかったわ。仲間を数十人連れてくるわ。」

「赤井は一人で来る。」

「そう…」

「お前たちは恋人だからな…愛する人を助ける為に、大勢連れて来るか…？」

「そうね。」

ボタン。

コツコツ。

「来たわね。」

「ああ。」

「私はあなたの後ろをついて来るわ。」

「ふんっ。勝手にしろ。」

コツコツと赤井秀一の足音が近づいて来た

「さあ。俺の仲間を返してもらおうか。」

「仲間か…ふっ。アクアビットがFBIの仲間か…」

「ゴメンなさい、赤井さん。」

赤井の前に現れたのは、真っ黒なスーツを着た朱梨だった。「コー
ドネームアクアビット。私よ。」

やっぱりダメ

「…」

「ふん。まんまと騙されたな、赤井秀一。」

「FBIには悪いけれど…あなたには死んでもらうわ。」

ベルモットが背後から現れた。

「A secret makes a woman woman . . .
女はヒミツを着飾って美しくなる…」

「その通り、ベルモット…その意味、やっと分かったわ。」

「朱梨…」

赤井秀一がジンと向き合っているなか、キャンティは二階からライフルを構えていた。

そのライフルの先は赤井秀一の背中だった。

「バカな男…」 つぶやきながら引き金を引いた。

「ダメエ！」

ズキュン！ズキュン！ズキュン！

「チツ。」
「キャンティは舌打ちをした。」

眞実

撃たれたのは赤井秀一ではなく

朱梨だった。

「ずらかるぞ、キャンティ。」

「あいよ。」

二人は裏口から出て行った。

「朱梨…！」

赤井は朱梨に駆けつけた。

一発は肺を撃ち抜き、二発は肩を撃ち抜いた。

「赤井さん…うっ…」

「しゃべるな、今仲間を呼ぶ。」

「明美お姉ちゃんが言ってた通り、見かけとは違って優しい人なのね……」

赤井は手を止めた。

「明美……？」

「ごめん……なさい……私……今まで……うっ……ずっと嘘ついてた……私の本名は……っ……宮野明保……志保ちゃんと……明美お姉ちゃんの従姉妹よ……」

「い、従姉妹……？」

サヨナラ

「中学生の頃正式に組織に入ったわ…その後…家族は組織に殺された事を証明する為の証拠を得る為に…組織を壊滅させようとした…うっ…ゴホッ！」

朱梨は血を吐いた。

「もういい！しゃべるな！」

「明美お姉ちゃんは今気で赤井さんを愛していたわ…こんなステキな人の彼女だった明美お姉ちゃんが…羨ましかった…」

朱梨の目から涙が一筋流れた。

「赤井さん…お姉ちゃんの事を忘れないで…」

「分かっている。」

「良かった…」

朱梨は最後の力を振り絞り、起き上がった。

そして、桃色の唇を赤井のとくつつけた。

「ありがとう…」

そう言って。

朱梨はゆっくりと目を閉じて。

静かに赤井から離れ。

床に崩れた。

馬鹿な女

「宮乃さん？」 ジョディーが駆けつけた。「シユウ？何が起きたの？」

「……」

「ねえ、シユウ？」

「あの女にそっくりだ……」 赤井はそうつぶやき、立ち上がった。「後は頼む。」

「ちよ、シユウ？」

「赤井さん？」 キヤメロンが駆けつけた。朱梨の無惨な姿を見て、止まった。

「もう……手遅れよ……」

赤井の目がいつもより濡れていて、手でこすったのは、ジョディーの幻覚だったのだろうか。

「赤井さん！なんで宮乃さんを救えなかったんですか！何故……何故……」 キヤメルは赤井を引き止めた。

「キヤメル！お前はFBIの任務を忘れたのか！？FBI捜査官である以上、いつも生死の間にいるんだ。」

「っ……」

「シユウ。」

「俺は用事がある。後は頼む。」

赤井はそう言い捨て、倉庫から出た。

……ココは明美が射殺された倉庫……

赤井はふと気付いた。

……明美と明保……

どちらとも馬鹿な女だったな……

あいつの声

―一週間後―

「ねえ、シユウ。今日コナン君と作戦会議を行うんだけど、シユウも来ない？」

「またあの坊やか……」

「ええ。コナン君よ。」

「あの坊やにはいつも驚かされる。」

「そうね……あのシエリーと呼ばれる茶髪の女の子とも関係が深いし

……私たちFBIには欠かせない味方ね。」

「フツ……」

赤井は歩き出した。

「ちよつと、シユウ。どこ行くの？」

「コーヒー。」

「全く……水無怜奈がいると言つのに……」

「やっとあの狼共に会えるのだから……ちゃんと備えとおかないと厄介なことになるから……」

「シユウ。」

「じゃ。」

赤井には聞こえる。

あの明るい声。

「大君！大君！」

赤井はふつと笑った。

「……馬鹿な女……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3089/>

黒の組織からの女の恋

2010年10月11日01時26分発行